



羅針盤

吉川 義顕
Yoshiaki Yoshikawa

公益財団法人 田附興風会 医学研究所 北野病院 皮膚科主任部長



古典的外用薬を学ぶ

このたび、古典的外用薬に代表される「昔ながらの外用药」とコレクチム[®]軟膏を含む「新しい外用薬」の特集号を企画しました。新しく発売された薬剤には誰もが興味を持つでしょうし、最新の情報を取り入れて知識をアップデートしておくことは大切なことです。では、古典的と呼ばれるような昔から使われている外用薬を学ぶことに、どのような意義があるのでしょうか？

そもそも「古典」とは何でしょう？『読書術』（加藤周一著、岩波書店、2000年）という本を読まれた方は多いかもしれません。その本に古典についての記述がありましたので、以下に私なりに解釈して紹介いたします。

古典とは思想を学び、ものの考え方を理解するための書物です。例えば、論語は古典です。古事記、万葉集、源氏物語などは日本の古典と言えるだろうと書かれています。西洋では聖書とギリシャ思想（例えばプラトン）が古典にあたります。そして古典と現代文学とでは推奨される読み方に違いがあり、古典の場合には先にあげたどれかひとつだけでもいいので、時間をかけて丁寧に精読するのが良く、現代文学の場合には沢山の作品を読む必要があるため、同時に何冊かの本を速読するのが良いとされています。

誤解を避けるため書き添えておきますが、文芸には古典があるが、自然科学などに同じ意味で古典を考えることは難しい、と著者は述べています。私も、上記のよう

な古典の定義がそのまま「古典的外用薬」に当てはまることは考えてはいませんが、「中らずと雖も遠からず」という印象を受け、興味深いと思いました。

古典的外用薬を使用するには、基剤の種類や役割を理解しておかなければなりません。基剤は外用薬の効力や塗り心地などに影響する基礎的で重要な知識のひとつです。その知識は、外用薬の選択や混合処方の際にも必要です。また、古典的外用薬は新しい外用薬と比較し使用感が悪く除去もしにくいため、上手に使いこなすには、外用方法や外用指導にも精通しておく必要があります。新しい外用薬のみを使用していたのでは経験できない外用療法の奥深さを知ることもあれば、思っていた以上の高い効果を得て喜びを感じることもあります。

こうしてみると、古典的外用薬は単に昔に使われていた古い外用薬ではなく、外用療法の基本と本質を学ぶには絶好の学習材料であるとともに、今も積極的に活用すべき外用薬だと思います。論語を精読するようにとまでは言わないまでも、時間をかけてゆっくりと学ぶ価値がありそうです。

本特集号が、診察のお役に立つとともに、古典的外用薬に興味を持つきっかけになることを期待しています。

最後に、この企画のためにご協力いただいた多くの執筆者の先生方に深く感謝申し上げます。